Comparison of 2-year Outcomes between Zotarolimus-eluting and Everolimus-eluting New-generation Cobalt-Chromium Alloy Stents in Real-world Diabetic Patients

メタデータ	言語: English
	出版者:
	公開日: 2015-04-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 宮﨑, 忠史
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001919

授与機関名　順天堂大学

学位記番号　乙第 2343 号

Comparison of 2-year Outcomes between Zotarolimus-eluting and Everolimus-eluting New-generation Cobalt-Chromium Alloy Stents in Real-world Diabetic Patients

(実臨床の糖尿病患者における、新世代ゾタロリムスおよびエベロリムス溶出性コバルトクロム合金ステント留置術後 2 年の予後比較)

宮﨑　忠史（みやざき　ただし）

博士（医学）

論文内容の要旨

本研究は、糖尿病患者において、異なる種類の薬剤溶出性コバルトクロム合金ステントの使用が予後に与える影響を検討することを目的とした。2006 年 10 月から 2012 年 8 月までの間にイタリアの 2 施設において新世代のゾタロリムス溶出性ステント（136 人, 196 病変）あるいはエベロリムス溶出性ステント（264 人, 357 病変）の冠動脈留置術を受けた糖尿病患者を本既往コホート研究の解析対象とした。主要評価項目は術後 2 年の（非心血管死を含む）全死亡・（周術期心筋梗塞を含む）全心筋梗塞・標的血管再血行再建を複合した主要有害心事象とし、術後 2 年の死亡・心筋梗塞の複合心事象、標的血管再血行再建をそれぞれ副次評価項目とした。患者背景には両群間に明らかな差は認められなかった。多枝へのカテーテル手術の施行、再狭窄病変への治療、血管内超音波カテーテルの使用はいずれもゾタロリムス溶出性ステント群で多く見られた。一方で 2.5mm 以下のステントの使用はエベロリムス溶出性ステントで有意に多く認められた。2 年後の主要有害心事象に両群間で有意な差はなく（ゾタロリムス溶出性ステント 22.8%, エベロリムス溶出性ステント 18.9%, P=0.39）、死亡・心筋梗塞の複合心事象（10.0% vs 10.3%, P = 0.86）、標的血管再血行再建(12.4% vs 7.4%, P = 0.11)それぞれにも統計学的に有意な差は認められなかった。また多変量解析の結果から、糖尿病患者に対しては新世代のステントの今日においてもなお、インスリン治療、慢性腎臓病、治療病変枝数、再狭窄病変への治療が主要有害心事象の、長いステント長と再狭窄病変が標的血管再血行再建の予後予測因子であった。さらにプロペンシティーマッチング後のコホートについても両群で予後比較を行ったが、結果はマッチング前と変わりなく、主要有害心事象、副次評価項目のいずれにおいても両群間の差は認められなかった。すなわち、ハイリスク患者や複雑病変を含む実臨床に則した糖尿病集団を対象とした本研究において、新世代ゾタロリムス溶出性あるいはエベロリムス溶出性コバルトクロム合金ステントの冠動脈留置術を受けた糖尿病患者の 2 年後の予後は同等であった。